

虚構からの知識獲得を扱うための哲学的虚構論の検討

A Study on Philosophical Theory of Fiction for Knowledge Acquisition from Fictional Works

学籍番号：201721676

氏名：鈴木 友里亜

Suzuki Yuria

我々は読書をする時、様々な本を読み、内容に応じ様々なものを得ると考えられている。それらは単なる個人の所感にとどまる場合もあれば、何らかの出来事の疑似体験であったり、現実世界に対応する知識であったりする場合もある。我々が読む本の中には現実にあつたことではない、虚構の話が書かれた作品もある。我々はそのような作品からも、現実世界で有用な知識を得ることがある。本稿では、虚構的作品から得られる現実世界についての知識に対して、それらがどのように得られていて、どのような知識であるのかについて説明が可能と思われる理論を提示し、更に実際に理論を用いた分析を行うことで、理論の有用性と有効範囲について考察を行った。

本稿ではまず、文献調査に基づき、虚構的作品からの知識獲得に対して説明が可能な虚構論を展開した。この虚構論はライアンによる可能世界論・言語行為論を融合したものを基本とし、理論の不足点をルイスによる可能世界論や文学におけるテキストにまつわる概念で補強したものである。更に、実際に読書感想文から知識を獲得していると思われる表現について抜き出し、補強後のライアン虚構論に基づき分析を行った。

読書感想文の分析を通し、本稿で提示した理論によって虚構からの知識獲得に説明が加えられること、その下で得られる知識獲得には大きく3つのパターンがあることが明らかになった。ただし、今回分析したものの中にはこの理論では説明がつけられないような、それでいて一見知識獲得らしきものもあつた。それらについても説明するためには、到達関係の設定範囲を狭めることや、ルイスの組み換え原理、ウォルトンのごっこ遊び理論による虚構理論への更なる補強が有効であると予想された。

また、虚構からの知識獲得における既存の知識・経験・価値観の影響の大きさや、得られると言える知識の特性といった視点では、図書館情報学における知識・情報観や、文学においてテキストが持つとされる性質との親和性が見られた。これらの分野との関連性の検討は今後の課題であり、既存の各理論を補強する形での貢献が期待される。

研究指導教員：横山 幹子

副研究指導教員：緑川 信之